

教師志望の規定要因に関する研究

—大学生の家庭的背景に着目して—

太 田 拓 紀

1. はじめに

1.1. 問題の所在

現代は教師受難の時代といっても過言ではないだろう。変容した子どもたちと親への対応、成果主義の導入に伴う学校・教員評価など、学校内の勤務環境は切迫感を増すばかりである。一方、学校の外部では教師の問題行動、指導力不足等に対する報道が沸騰し、ネガティブな教師像が過剰に構築されている。こうした時代に、どのような若者が教師という職業をめざすのだろうか。本稿の目的は大学生の生活・意識調査に基づき、主にその家庭的背景から教師志望の規定要因を明らかにすることである。

若者たちが教師をめざす理由は一様ではない。しかし、教師の社会的地位、身分の安定など社会的・経済的側面以上に強調されるのが、その主観的要因だとされる。例えば、「過去における素晴らしい教師との『出会い (Begegnung)』経験、教師への性格的適合についての自覚、そしてしばしば『子どもが好き』という言葉に象徴されるところの子どもたちとの交わりや、教えることへの強い関心など」(藤枝 2002, p.15-16) である。その一方、教育社会学の領域では教師志望について、将来の教師という職業の役割を見越して社会化されるという、職業的社会化、とりわけ学生の予期的社会化 (anticipatory socialization) の枠組で広く検討されてきた。予期的社会化研究の射程は多岐にわたり、研究・調査の数も多いが、教師志望に関する本稿の問題意識に沿って大きくまとめると、次のようになるだろう。

1. 教師を志望する理由として、生きがい、やりがいや、適性を挙げるものが多いが、なかでも、学校で出会った教師の影響が大きいとされる (今津 1978, 伊藤 1980, 伊藤・山崎 1986 1989, 小島・篠原 1985, 武藤・松谷 1991, 山崎 2002, 木村ほか 2006など)。

2. 志望時期としては、大学入学以前といった比較的初期の段階に確定している者が多い (松本・生駒 1984, 小島・篠原 1985, 伊藤・山崎 1986, 山崎 2002など)。

3. 教員養成学部生の家計支持者として、全般的にホワイトカラー層が多く、また近親者に教師がいる比率が高い (池田 1974, 溝口 1975, 小野 1975, 今津 1978, 伊藤 1979, 松本・生駒 1984, 木村ほか 2006など)。

4. 教員養成学部生は地元出身者の割合が高いと同時に、卒業後の教師として地元就職希望者が多く、いわゆる土着性が高い (池田 1974, 溝口 1975, 小野 1975, 今津 1978, 伊藤 1979, 松本・生駒 1984など)。

このように予期的社会化研究は、教師を目指す若者像、教師供給層の社会的性格を明らかにしてきた。だが、いくつかの課題を指摘しておかなければならない。まず、研究者が所属する教員

養成大学の学生にサンプルが限定される傾向が強いことである。それは、「大学で教員養成に携わる研究者がよりよい教育プログラムの開発という実践的な課題のために、学生の意識調査を行う」（耳塚ほか 1988, p.89）という研究視角に起因するものと思われる。ただし、周知のように開放制の教員養成制度においては、教員養成大学、教育学部以外の学生も重要な教員供給源であり、彼らを無視することはできないだろう。またそれと関連して、先行研究の多くが教師を志望しない者との比較という視点が弱いため、教師志望者の特質を十分把握できているのかという点に疑問が残る⁽¹⁾。さらに、教師志望の決定時期は比較的初期であるにもかかわらず、大学入学以前の教育的経験に着目した研究は少ない。

こうしたなか、紅林・川村の研究（1999）は、多数の大学の学生をサンプルとし、彼らの大学入学以前の教育経験から教師志望に言及したものとして注目される。それによると、教師志望者は学校文化に親和的な学校体験を経ており、例えば学校内でのリーダー的役割を担っていた傾向が強く、教師との関係性も密であった。こうした学校体験が教師への社会的距離を左右したとして、教師志望の一要因とみている⁽²⁾。

ただし、学校体験のような当人の教育経験が教師志望に影響を及ぼすとすれば、さらに検討すべき要因があると思われる。それは、家庭での教育的背景である。義務教育段階の学校生活は、学校の地域性など変動要因もちろんあるが、大部分の子どもがほぼ均質的に経験するものといえる。しかし、学校以外での教育経験は、階層とそれに伴う経済資本・文化資本の保有量など、家庭的背景に大きく左右されることが予想できる。つまり、子どもの社会化に偏差をもたらす程度は、学校教育よりも大きい可能性をはらんでいる。

さらに、こうした教育経験と将来の職業選択との関連について、次の点を指摘しておきたい。ブルデューは、社会的行為者は必ずしも合理的に手段の収益率を最大化するように行動を組み立てたり、目標を設定したりするわけではないという。にもかかわらず、彼らの選択が結果的に常軌を逸せず理にかなったものとなるのは、「長期間の多岐にわたる条件づけの過程を通じて自分に与えられた客観的可能性を内面化して、自らに適した将来、自分たちのためだけにつくられているような将来を（「分不相応」という表現が示すあらゆる事態とは正反対のものとして）『読み取る』術を心得ているから」（Bourdieu avec Wacquant訳書 2007, p.172）だと説明している。つまり、将来の選択には階層や家庭教育などに刻印づけられたハビトゥスが媒介となって、何らかの作用をもたらすということである。よって、家庭的背景は、当人の将来意識、さらには教師という職業を「自らに適した将来」として志望・選択するという行為にも影響を及ぼすと想定できるはずである。

以上を踏まえ、本稿では教師志望者、教師以外志望者、志望職業未決定者の3群を主に設定し、18大学で実施した生活・意識調査を基に、大学生における教師志望の規定要因を、主に出身階層、家族との教育的文化的経験、習い事、将来意識から検討を試みる。本稿は従来の予期的社会化研究に位置づけることができるが、さらに、教員文化への影響についても論じたいと考えている。小澤（1994）がいうように、教員文化が、教員たちが身体化しているハビトゥスと、制度としての教育システムとの関連において生成されるとすれば、教師志望者のハビトゥスを検証することは、次世代の教員文化を規定する一側面を照らし出すことにつながるはずだからである。

1. 2. 資料

分析において用いる資料は、2006年に京都大学大学院教育学研究科教育社会学研究室が中心に実施した大学生対象の質問紙調査の一部である（太田編，2007）。調査実施校は関西を中心に、関東・東海・北陸・中国に所在する国立大学3校、私立大学15校の全18校であり、本稿で用いたサンプル数は1718名である。

表1: サンプルの基本的属性

		志望職業			計
		教師	教師以外	未決定	
性別	男性	149	258	374	781
	女性	150	330	456	936
	不明			1	1
学年	1年	158	274	326	758
	2年	65	146	298	509
	3年	36	94	168	298
	4年以上	35	73	37	145
	その他	4	1		5
	不明	1		2	3
学部	教育(養成課程)	55	10	17	82
	教育(それ以外)	44	47	66	157
	人文科学系	127	240	279	646
	社会科学系	24	104	194	322
	自然科学系	22	72	113	207
	総合科学系	27	113	158	298
	不明		2	4	6
	総数	299	588	831	1718

注: 学年の「その他」は科目等履修生, 研究生。

また、本稿の「教師志望者」とは次の者をいう。すなわち、上記大学生調査の質問「Q46 あなたは将来就きたい職業を決めておられますか」で「決めている」を選択した者のうち、下位質問「それはどのような職業ですか」の自由記述欄で「教師」「教員」などと答えた者を指す。それ以外の職業を記述した者は「教師以外志望者」とし、就きたい職業で「決めていない」を選択した者は「未決定者」と定義した。それらを集計し、その基本的属性を示したのが表1である。これを見ると、一般的な大学生の職業希望の構成と比べて、教師志望者が際立って多いという難点がある。ただし、本稿は教師志望者とそれ以外の者との比較に主眼をおいており、

その意味で教師志望者に十分なサンプル数があることは好都合な側面もあると思われる。

2. 分析結果

2. 1. 出身階層

表2: 教師志望者の出身階層

		父職					合計
		専門・管理	事務	販売・サービス	マニュアル・農業	その他	
志望職業	教師	97 32.4%	102 34.1%	26 8.7%	52 17.4%	22 7.4%	299 100.0%
	教師以外	173 29.4%	202 34.4%	79 13.4%	88 15.0%	46 7.8%	588 100.0%
	未決定	289 34.8%	254 30.6%	103 12.4%	124 14.9%	61 7.3%	831 100.0%
	合計	559 32.5%	558 32.5%	208 12.1%	264 15.4%	129 7.5%	1,718 100.0%

注: 「その他」には無職・該当者なし等が含まれる。

$\chi^2(8)=9.73, p>.05$

教師志望者の家庭的背景を探る上で、まずその出身階層を確認しておこう。表2は、教師志望者、教師以外志望者と職業未決定者それぞれの父職を集計したものである。回答者全体で高い比率を示すのは、「専門・管理」(32.5%)、「事務」(32.5%)といったホワイトカラー層であることが分かる。先に見た教員養成系大学の学生を中心とした先行研究でも、ホワイトカラーが教員のリクルート層として指摘されているが、それと矛盾しない結果となっている。しかし、各群で有

意差がないため、それが教師志望者に特有であるところのサンプルからはいえないだろう。また、伝統的に教師の出身階層に多かった農業の割合は低く、マニュアルとあわせた「マニュアル・農業」でも17.4%で、他群の学生と大きな隔たりがない。もちろん、これには産業構造の転換が影響していると考えられる。

すなわち、教師志望者とそうでない者（教師以外志望者、職業未決定者）とを比較すると、この3群において、その比率に大差なく有意差が見られなかった。階層の単純集計によっては、教師になる者とそれ以外の者の差異を確認することはできないのである⁽³⁾。

2.2. 家族との教育的文化的経験

では次に、家族との教育的文化的経験について検証したい。一般的に階層によってその教育戦略の異なることが指摘されるが、いったい親・家族との教育的文化的接触において、教師志望者に何らかの特徴を見出せるのだろうか。表3は、中学生くらいまでの家族との教育的文化的経験の頻度をたずねた3つの質問項目を従属変数とし、分散分析により教師志望者とそれ以外の者について比較したものである⁽⁴⁾。

結果を見ると、いずれの項目も教師志望者が高い値を示し、有意差がある。教師志望者は学習、旅行、文化的経験において家族との接触度が高かったことがわかる。

ところで先にも述べたが、こうした家庭での教育的経験

は親の階層に左右されることが広く知られている。そこで、表3における3つの質問項目の回答の平均値を従属変数「家庭教育」（平均値2.97，標準偏差0.65）として設定し、階層と志望職業による2要因の分散分析を実施した。なお、内的整合性を検証するために、「家庭教育」の下位尺度の α 係数を算出すると、 $\alpha = .62$ と分析可能な一応の整合性を確認できた。

表4を見よう。列を上から順に見ると分かるように、家庭教育の平均値は、志望職業3群とも「専門・管理」のホワイトカラー層が最も高く、それに比して「マニュアル・農業」は低い値を示している。また、中でも興味深いのは、教師志望者は、多くの階層で他の職業志望者や未決定

表3: 教師志望者の家族との教育的文化的経験(平均値と標準偏差)

	志望職業						
	教師 n=299		教師以外 n=587		未決定 n=829		
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	
親(保護者)が勉強を教えた	2.95	(0.91)	2.92	(0.90)	2.82	(0.92)	*
家族と旅行に行った	3.54	(0.68)	3.36	(0.75)	3.31	(0.74)	***
家族と美術館・博物館・コンサートに行った	2.79	(0.96)	2.68	(0.99)	2.58	(0.92)	**

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表4: 教師志望者の階層別「家庭教育」(平均値と標準偏差)

		志望職業					F値			
		教師 n=299		教師以外 n=587		未決定 n=827	父職	志望職業	交互作用	
		M	(SD)	M	(SD)	M				(SD)
父職	専門・管理	3.26	(0.57)	3.15	(0.62)	3.03	(0.62)	6.93***	3.01**	0.20
	事務	3.11	(0.59)	3.01	(0.65)	2.96	(0.60)			
	販売・サービス	2.88	(0.73)	2.93	(0.65)	2.84	(0.68)			
	マニュアル・農業	2.90	(0.67)	2.83	(0.67)	2.65	(0.68)			
	その他	2.95	(0.77)	2.70	(0.69)	2.67	(0.70)			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

者よりもそれぞれ高値を示している点である。もちろん、3つの回答のみから教育的文化的経験の強弱の妥当性を十分に示せるものではないが、それを踏まえた上でいえば、教師志望者は他群よりもそれらを多く経験していたとみることができよう⁽⁵⁾。

2.3. 習い事の経験

もう一点、家庭に関わる教育的経験として、習い事についてみていきたい。習い事は学校での教育体験と異なり、誰もが一律に等質の経験をするものではない。進学塾、スポーツ、芸術など多岐にわたるプログラムが存在し、それに参加するか否か、どのプログラムに参加するかによって、子どもの学習経験に多様性をもたらす。また、習い事の選択には保護者の文化的・経済的背景や教育意識が媒介することが予想され、それらの観測変数と見ることもできよう。

表5: 教師志望者の小学校までの習い事経験率(%)

	男性			女性		
	教師 n=149	教師以外 n=258	未決定 n=374	教師 n=150	教師以外 n=330	未決定 n=456
学習塾	57.7	58.1	52.4	50.0	61.5	57.9
英会話	14.8	17.4	13.9	24.0	26.4	30.0
習字	40.3	40.3	30.2	52.7	52.4	56.8
スポーツ教室	79.9	70.9	59.1	62.7	57.6	56.6
音楽教室	36.9	29.5	21.9	78.7	73.9	74.8

表6: 教師志望者の小学校までの習い事経験数(平均値と標準偏差)

	男性			女性			F値		
	教師 n=149	教師以外 n=258	未決定 n=374	教師 n=150	教師以外 n=330	未決定 n=456	性別	志望職業	交互作用
M	2.30	2.16	1.78	2.68	2.72	2.76			
(SD)	(1.03)	(1.20)	(1.17)	(1.11)	(1.25)	(1.30)	100.60 ***	5.29 **	13.37 ***

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

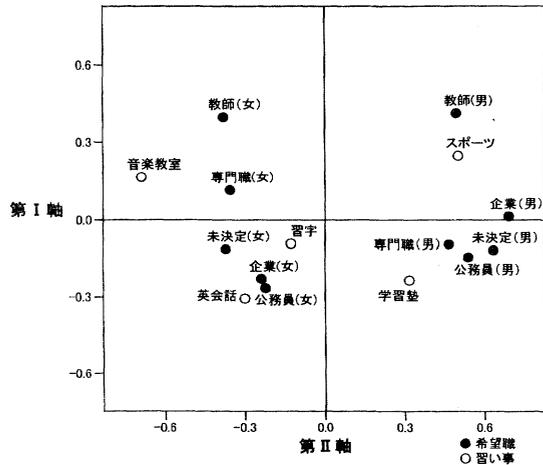
では、いったい教師志望者が経験した習い事にはどのような特徴があるのだろうか。表5は、小学校までの習い事(5項目)について、教師志望者とそれ以外の者との経験率を示したものである。教師志望者は、他群と比べて、男女ともスポーツ教室、音楽教室の経験率が他と比べて若干高いようである。また、当該質問は複数回答方式に設定してあるため、表6では、性別、志望職業を独立変数として、5項目の習い事経験数を従属変数とする分散分析を実施している。交互作用が有意であることから単純主効果の検定を行うと、男性の場合における志望職業の効果が有意となった($F(2,1711) = 13.20, p < 0.001$)。結果、習い事の経験数では、男子の教師志望者は他群と比べて明確に多くなり、一方、女子は他群より若干少ないことがわかった⁽⁶⁾。

さらに対応分析により、志望職業と小学校までの習い事の関係性を示した(図)。なお、これまで教師以外の職業を志望する群を「教師以外志望」として一まとめにしてきたが、それらを具体的な志望職業の内容から「専門職」「公務員」「企業」の3つにコーディングしなおしている⁽⁷⁾。図を確認すると、第I軸は「志望職業の男-女」と性別に、第II軸は「文化・運動系-学習系」と習い事のジャンルに関する軸と読み取ることができる⁽⁸⁾。さて結果であるが、男性の場合、教師志望者はスポーツとの関連が強いことが分かる。専門職、公務員志望者が学習塾に偏っているのと対照的である。一方、女性の教師志望者は専門職志望と同じく、音楽教室との関連が高いように思われる。教師志望が専門職志望と異なる点は、第II軸のより高い位置にプロットされた点

であり、そのことは、学習系の習い事を最も経験していないグループであることを示している。また、公務員、企業志望者については英会話への集中度が高い。

すなわち、小学校までの習い事の経験に関する教師志望者は、他群と同様に2～3の習い事を重複して経験していたが、特徴的なのはスポーツや音楽を経験する比率が高いことだといえるだろう⁽⁹⁾。

図：志望職業と小学校までの習い事



2.4. 将来意識

これまで階層、家庭での教育的経験、習い事から、教師志望者の特徴について

概観してきた。次に、それらの変数と関連があると思われる将来意識についてみていきたい。特定の階層・家庭教育の影響を受けた個人が、特徴的なものの見方や実践感覚、すなわちハビトゥスを身体化していると想定すれば、特定の将来意識の志向性に反映していることが予想できる。では具体的に、教師志望者は将来に対してどのようなことに価値をおいているのだろうか。

表7: 将来目標意識の因子パターン (N=1697)

	因子			
	立身出世	家族重視	社会貢献	個性志向
高い地位につくこと	0.811	-0.088	0.069	-0.033
高い収入を得ること	0.665	0.028	-0.065	0.028
世間的に評判のよい職業に就くこと	0.549	0.094	0.001	0.031
幸せな家庭をもつこと	0.042	0.753	-0.037	-0.040
両親やきょうだいを大切にすること	-0.027	0.637	0.097	0.010
恵まれない人達を支援すること	-0.079	0.022	0.730	0.065
社会の発展のために尽くすこと	0.089	0.024	0.633	-0.043
自分の能力や性格に合う職業を見つけること	0.028	0.075	-0.087	0.698
自分の興味や関心を追求すること	-0.004	-0.111	0.116	0.528
固有値	2.426	1.566	1.231	1.083
回転後の因子寄与	1.543	1.318	1.243	0.946

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列

因子	立身出世	家族重視	社会貢献	個性志向
立身出世	1.000			
家族重視	0.223	1.000		
社会貢献	0.184	0.386	1.000	
個性志向	0.174	0.284	0.200	1.000

表7は、将来に関する意識をたずねる質問を因子分析した結果である⁽¹⁰⁾。質問項目のまとまりとその意味を慎重に検討し、4因子に分類した結果、累積寄与率は46.86%となった。因子はそれぞれ、「立身出世」(「高い地位」「高い収入」「評判のよい職業」)、「家族重視」(「幸せな家庭」「両親・きょうだい大事」)、「社会貢献」(「恵まれない人支援」「社会発展に尽力」)、「個性志向」(「能力・性格に合う職業」「自分の興味・関心追求」と呼称することとする。では、この4つの

因子が教師志望者とそれ以外の者に対して、どの程度影響を及ぼしているかを確認しよう。

表8:教師志望者における将来目標意識の因子得点(平均値と標準偏差)

	男性			女性			F値		
	教師 n=149	教師以外 n=256	未決定 n=370	教師 n=147	教師以外 n=327	未決定 n=447	性別	志望職業	交互作用
「立身出世」 M (SD)	-0.257 (0.877)	0.015 (1.014)	0.128 (0.894)	-0.242 (0.800)	0.034 (0.881)	0.028 (0.747)	0.23	15.83 ***	0.98
「家族重視」 M (SD)	0.079 (0.738)	-0.099 (0.872)	-0.170 (0.930)	0.186 (0.674)	0.069 (0.796)	0.063 (0.796)	14.88 ***	5.55 **	0.70
「社会貢献」 M (SD)	0.109 (0.852)	0.045 (0.918)	-0.207 (0.849)	0.146 (0.701)	0.127 (0.811)	-0.033 (0.749)	5.03 *	15.55 ***	0.97
「個性志向」 M (SD)	-0.056 (0.808)	-0.114 (0.826)	-0.117 (0.843)	0.039 (0.685)	0.128 (0.737)	0.073 (0.695)	18.56 ***	0.25	0.89

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

表8は因子分析によって得られた因子得点を従属変数とし、性別、志望職業を独立変数とする分散分析を試みたものである。さて、その結果を因子ごとにみていくと、まず「立身出世」は性別に有意差はないが、教師志望者は男女とも他群と比較してその値が極端に低いことが見てとれる(男性: -0.257、女性: -0.242)。その一方で、「家族重視」は女性が全般的に高い傾向があるが、こちらは男女とも教師志望者の値が最も高くなっている(男性: 0.079、女性: 0.186)。「社会貢献」についても同様に、教師志望者が高い(男性: 0.109、女性: 0.146)。しかし、「個性志向」だけは志望職業に有意差が見られない結果となった。

2.5. 教師志望の規定要因—教師志望とそれ以外の学生を分かつもの—

分析の最後に、これまでみてきた変数のうち、具体的に何が教師志望を規定しているのかを、多項ロジスティック回帰分析を用いて検証しよう。従属変数と独立変数は以下のとおりである。

<従属変数>

志望職業: 「教師志望」、「教師以外志望」、「未決定」の3つのカテゴリー。分析では、「教師以外志望」を参照カテゴリーとした場合の「教師志望」の結果と、「未決定」を参照カテゴリーとした場合の「教師志望」と「教師以外志望」の結果をそれぞれ示した。これにより、3つのカテゴリーをもつ従属変数のすべての組み合わせについて確認できる。

<独立変数>

階層: 父職の「専門・管理」、「販売・サービス」、「マニュアル・農業」、「その他」をダミー変数として用い、「事務」を参照カテゴリーとした。

教育的文化的経験: 2.2.で生成した「家庭教育」(3質問項目の平均値)を用いる。

習い事: 「学習塾」、「英会話」、「習字」、「スポーツ教室」、「音楽教室」の経験の有無から、それぞれダミー変数を設定した。

将来意識: 2.4.の因子分析によって生成された因子得点を利用している。

太田：教師志望の規定要因に関する研究

さて、表9がその分析結果となる。まず、出身階層であるが、男性の場合、教師以外志望者を参照カテゴリーとした場合、教師志望者の父職「マニュアル・農業」に正の一応の効果が確認できる（係数0.575、ただし $p<.10$ ）。女性の教師志望には、未決定者を参照カテゴリーにした際に、

表9:教師志望の規定要因 (男性:N=773, 女性:N=918)

		教師志望／教師以外志望		教師志望／未決定		教師以外志望／未決定		
		係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	
男性	階層 化的 育的 的 文	切片	-1.965 ***		-2.926 ***		-0.961 *	
		父職(専門・管理)ダミー	0.288	1.334	0.110	1.117	-0.178	1.117
		父職(販売・サービス)ダミー	-0.147	0.864	-0.384	0.681	-0.237	0.681
		父職(マニュアル・農業)ダミー	0.575 #	1.777	0.518	1.679	-0.056	1.679
		父職(その他)ダミー	-0.548	0.578	-0.330	0.719	0.218	0.719
	習い事	家庭教育	0.299 #	1.348	0.347 *	1.415	0.048	1.049
		学習塾ダミー	-0.078	0.925	0.098	1.103	0.176	1.193
		英会話ダミー	-0.375	0.687	-0.251	0.778	0.124	1.132
		習字ダミー	-0.076	0.927	0.302	1.353	0.378 *	1.460
		スポーツ教室ダミー	0.535 *	1.707	0.955 ***	2.599	0.420 *	1.522
		音楽教室ダミー	0.271	1.312	0.506 *	1.658	0.234	1.264
	将来意識	「立身出世」因子得点	-0.473 ***	0.623	-0.700 ***	0.496	-0.227 *	0.797
		「家族重視」因子得点	0.371 *	1.449	0.293 #	1.341	-0.078	0.925
		「社会貢献」因子得点	-0.006	0.994	0.429 **	1.536	0.436 ***	1.546
		「個性志向」因子得点	0.010	1.010	-0.015	0.985	-0.025	0.976
	モデル χ^2		109.244***					
	自由度		28					
	Cox&Snell擬似R ²		0.132					
	Nagelkerke擬似R ²		0.151					
女性	階層 化的 育的 的 文	切片	-1.343 *		-2.386 ***		-1.043 *	
		父職(専門・管理)ダミー	-0.185	0.831	-0.492 *	0.612	-0.306 #	0.736
		父職(販売・サービス)ダミー	-0.553	0.575	-0.370	0.691	0.183	1.201
		父職(マニュアル・農業)ダミー	-0.150	0.861	-0.087	0.916	0.063	1.065
		父職(その他)ダミー	0.388	1.475	0.405	1.500	0.017	1.017
	習い事	家庭教育	0.127	1.136	0.415 *	1.515	0.288 *	1.334
		学習塾ダミー	-0.457 *	0.633	-0.339 #	0.713	0.118	1.125
		英会話ダミー	-0.169	0.845	-0.400 #	0.670	-0.231	0.793
		習字ダミー	0.015	1.015	-0.187	0.829	-0.202	0.817
		スポーツ教室ダミー	0.341	1.407	0.371 #	1.450	0.030	1.030
		音楽教室ダミー	0.305	1.357	0.304	1.356	-0.001	0.999
	将来意識	「立身出世」因子得点	-0.495 ***	0.609	-0.536 ***	0.585	-0.041	0.960
		「家族重視」因子得点	0.418 *	1.518	0.217	1.242	-0.201 #	0.818
		「社会貢献」因子得点	0.104	1.110	0.392 *	1.480	0.288 *	1.334
		「個性志向」因子得点	-0.294 #	0.746	-0.177	0.838	0.116	1.124
	モデル χ^2		68.921***					
	自由度		28					
	Cox&Snell擬似R ²		0.072					
	Nagelkerke擬似R ²		0.083					

#: $p<.10$, *: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

父職「専門・管理」(-0.492)が負の影響を及ぼしている。次に、家庭教育の変数は、おおむね男女ともに志望職業における教師の選択に寄与しているといえる。女性は、教師以外志望者を参照カテゴリーにすると、その効果は確認できないが、未決定者を参照すると教師の選択可能性に効力をもっている(0.415)。また、習い事については、やはり男性で「スポーツ教室」の経験が教師志望の判別に有意な効果をもたらしている(参照カテゴリー「教師以外志望」:0.535、参照カテゴリー「未決定」:0.955)。同じく、「音楽教室」の効果も見られる(参照カテゴリー「未決定」:0.506)。女性は未決定者を参照カテゴリーにした場合に、「スポーツ教室」の一応の影響が確認できる(0.371, ただし $p < .10$)。さらに、女子の場合には、「学習塾」や「英会話」に負の効果をもたらす傾向がある(例えば、参照カテゴリー「教師以外志望」学習塾:-0.457)。最後に、将来意識について男女ともほぼすべての組み合わせで、「立身出世」因子が志望職業における教師志望の判別に負の影響があり、「家族重視」因子が教師志望に一定の寄与が認められる。また、男女とも未決定者に対しては、「社会貢献」因子も教師志望の判別に影響を及ぼしていることが分かる。

3. おわりに

3.1. 家庭的背景からみた教師志望者像

以上の分析から、教師になろうとする若者たちの姿をどのように描くことができるだろうか。まず、家族との教育的文化的接触が緊密であったものが、教師を志望する傾向がありそうだということである。また、習い事に関して、教師志望者は他群よりもスポーツや音楽教室の経験がいくらか豊富であって、職業選択における教師志望の判別要因として一定の効果が認められた。さらに、教師志望者が将来に価値を見出すのは、「立身出世」といった自らの地位達成ではなく、「家族重視」という近親者との紐帯であった。同じ標本の大学生調査の分析では、将来のための手段(「学歴」「能力」「人柄」「運」「努力」と、本稿で確認されたのと同じ将来目標因子(「立身出世」「家族重視」「社会貢献」「個性重視」)との関連を調べている。それによれば、「立身出世」を志向するものは、将来の生活の手段として「学歴」「能力」に、「家族重視」を支持するものは、「努力」とともに「人柄」に価値を見出していた点を明らかにしている(太田編 2007, pp.60-61)。教師志望者は家族との関係が比較的緊密であり、将来の生き方を自らの地位達成ではなく、「人柄」「家族重視」などの人間関係性を志向していると考えられ、それが教師志望を規定する特有のハビトゥスとみることもできるように思われる。

とすれば、数多くの先行研究で、教師志望に大きな影響力を与えたとされる「素晴らしい教師との出会い」も次のように解釈できるのではなかろうか。つまり、素晴らしい教師に出会うのはなにも教師志望者たちだけではない。しかし、優れた実践をおこなう教師に「素晴らしい」と感じて、そのようになりたいと憧れる者はその一部にすぎないのではないだろうか。その憧憬の前提には、そうした教師を自らの将来像における準拠的個人(reference individual)として知覚するような性向があらかじめ備わっていなければならない。比較的家族関係が濃密であり、人間関係性を志向する彼らは、教師の人間性に感応するハビトゥスを身体化していたのであって、それこそが彼らを教師の道へと導くのではないだろうか。

3.2. 教員文化との関連

さらに、本稿の分析結果と教員文化との関連の可能性を指摘しておきたい。それは、教師志望者たちの家族的・人間的関係性志向が、学校組織の歴史性、伝統性として指摘される「学校内家族主義」(中内 1969)、「家族主義」(児島 1974)に適合的ではないかということである。家族制の論理を擬制とする「家族主義」としての学校、教員集団は、「温情-共同-献身といった『和』の結合原理に基づくもの」であり、「多機能的なコミュニティとしての性格をもつもので、単一機能としてのアンシェーションとしての性格をもつものではない」(児島 1974, p.89)。確かに、家族のような第1次集団(primary group)との紐帯が強く、共同体志向ともいえるべき教師志望者たちは、こうした場にそれほど齟齬なく適応する可能性が高いように思われる。さらに、「家族主義」の学校のような、「公私の別なく、人格的支配が優先する組織においては、業績主義より帰属主義が優先する」(同上)のであり、本分析でみた教師志望者の地位達成意識(「立身出世」)の低さは、業績主義が二次的とされる学校組織の社会的性格に無関係ではないように推測される。

ブルデューは「ある位置に結びついたさまざまな性向はいずれも同質のものであり、またこの位置につきもののいろいろな要請にたいして一見奇跡的とも思えるほどに適合しているものである」(Bourdieu訳書 1990, pp.172-173)と述べている。これまでの分析結果をみていると、教師志望者の性向は、学校文化、教員文化に整合する部分があるように思われてならないのである。

3.3. 課題

最後に今後の課題を述べておきたい。本稿では大学生の質問紙調査に基づき、彼らの家庭的背景に焦点を定め、教師志望の規定要因を探ってきた。しかし、教師志望者には近親に教師が多いことが指摘されてきたにもかかわらず、その影響について本稿では確認できなかった。また、本稿でみられた家族重視の志向性は、これまで数多く指摘されてきた教師の地元志向などと関連があるように思えるが、掘り下げて論じることができなかった。さらに、階層、家庭教育の経験から教員志望の規定要因を探るには、一定の限界があることは否めないだろう。紅林・川村(1999)が目撃した学校体験や、そこでの学業成績などを含めて多角的な要因を検討する必要がある。それ以外にも、個人の属性や経験のみならず、今津(1979)が指摘したように、「教育学部に入学したのだから」、「教育学部生なのだから」という教師予備軍としての役割取得など、制度的要因も吟味する必要があるだろう。これらについては他日を期したい。

〈注〉

- (1) 教員養成課程とそれ以外の学生など課程・学部間を比較した研究はあるもの(木村ほか 2006など)、その多くは同一大学内での比較にとどまっており、また厳密な意味で教師志望とそれ以外の学生を比較したものは少ない。
- (2) 関連して、川村(2002)は、教員文化の再生産という枠組みから、現職教師の子ども時代の学校経験を検討している。
- (3) なお、性別について、男女それぞれのクロス表を作成して比較しても、職業志望者と出身階層は男女ともほぼ同様の比率を示し、有意差が見られなかった(男性：N=781, $\chi^2(8)=9.10$, $p>.05$ 、女性：N=936, $\chi^2(8)=10.69$, $p>.05$)。

- (4) 回答は「よくあった」「たまにあった」「ほとんどなかった」「全くなかった」の4段階評定。
- (5) なお、構成した家庭教育の変数を従属変数とし、志望職業と性別を独立変数として分散分析を実施した結果、平均値は男女ともやはり「教師」志望がもっとも高く（男性：3.10、女性：3.18）、つづいて「教師以外」（男性：2.85、女性：3.10）、「未決定」（男性：2.77、女性：3.01）の順となった。志望職業間では平均値はいずれも女性が高い。なお、性別、志望職業はいずれも0.1%水準で有意であったが、交互作用は認められなかった。
- (6) また、習い事の重複率を確認すると、男子は3群とも「塾×スポーツ」が最も多いが、他群と比べて教師志望者の比率が高いのは「スポーツ×音楽」（28.9%）、「塾×音楽」（24.2%）であった。また、女子は各群とも「スポーツ×音楽」が最も多いが、中でも教師志望者の比率が3群の中で最も高くなっている（48.7%）。
- (7) 「教師以外志望」者を再カテゴリー化した際、「専門職」「公務員」「企業」へと分類不能な職種等については、分析から除外している（計61名）。
- (8) 抽出された因子軸から、第Ⅰ軸（寄与率92.8%）、第Ⅱ軸（寄与率4.5%）を採用しており、2因子で寄与率は97.3%となる。
- (9) 階層と志望職業について関連がなかったことは表2ですで見したが、階層と習い事の経験の有無について、クロス表で確認すると「専門・管理」が高く「マニュアル・農業」が低い値を示す傾向にあったのは、女性の「スポーツ教室」と男女の「音楽教室」であった（ $p < .05$ ）。
- (10) 回答は「非常に重視」「やや重視」「あまり重視せず」「まったく重視せず」の4段階評定。将来意識に関わる質問紙の設計については、石田ほか（2005）を参考にしている。また、因子分析に関しては、因子間の相関を想定したため、斜交回転を採用している。

〈引用・参考文献〉

- Bourdieu, Pierre., 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit, (= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオンⅠ』藤原書店).
- avec Wacquant, Loic J.D., 1992, *Reponses: Pour une anthropologie reflexive*, Editions du Seuil, (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店).
- 藤枝静正, 2002, 「教師になるということ」, 日本教師教育学会編『教師をめざす』学文社, pp.13-21.
- 池田秀男, 1974, 「教員養成大学におけるプロフェッショナル・ソーシャライゼーションに関する調査研究（Ⅰ）」『広島大学教育学部紀要 第一部』23, pp.125-136.
- 今津孝次郎, 1978, 「学生の内的側面からみた教師養成過程」『三重大学教育学部研究紀要』第29巻第4号, pp.17-33.
- , 1979, 「教師の職業的社会化」『三重大学教育学部研究紀要』第30巻第4号, pp.17-24.
- , 1996, 『変動社会の教師教育』名古屋大学出版会。
- 石田浩・長尾由希子・元治恵子・深堀聡子・佐藤香・朴澤泰男・鶴田典子・本田由紀, 2005, 「高校生
の進路選択と意識に関する実証的研究（1）」『日本教育社会学会第57回大会 発表要旨集録』,
pp.105-110.
- 伊藤敬, 1979, 「教育学部学生の職業的社会化に関する一考察」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社
会科学篇』第30号, pp.99-119.
- , 1980, 「教育学部学生の教職志向性の展開過程」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学
篇』第31号, pp.115-128.
- ・山崎準二, 1986, 「教職の予期的社会化に関する調査研究Ⅰ」『静岡大学教育学部研究報告 人
文・社会科学篇』No.37, pp.117-127.
- , 1989, 「教員の職業的社会化の基礎的条件に関する調査研究」『静岡大学教育学部研
究報告 人文・社会科学篇』第40号, pp.187-214.
- 川村光, 2002, 「教師における予期的社会化の役割」『日本教師教育学会年報』第12号, pp.80-90.
- 木村育恵・中澤智恵・佐久間亜紀, 2006, 「国立教員養成系大学の学生像と教職観」『東京学芸大学紀要
総合教育科学系』第57集, pp.403-414.

太田：教師志望の規定要因に関する研究

- 小島秀夫・篠原清夫, 1985, 「大学生の職業意識形成過程の研究」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』34号, pp.281-296.
- 児島邦宏, 1974, 「学校経営における伝統性」『東京学芸大学 第1部門 教育科学』第25集, pp.85-96.
- 久富善之編著, 1994, 『日本の教員文化』多賀出版。
- , 2003, 『教員文化の日本の特性』多賀出版。
- 紅林伸幸・川村光, 1999, 「大学生の教職志望と教師化に関する調査研究 (1)」『滋賀大学教育学部紀要 I: 教育科学』第49号, pp.23-38.
- 松本良夫・生駒俊樹, 1984, 「『教員養成大学』学生の進路志望と教職観」『東京学芸大学紀要 I 部門』第35集, pp.63-75.
- 耳塚寛明・油布佐和子・酒井朗, 1988, 「教師への社会学的アプローチ—研究動向と課題—」『教育社会学研究』第43集, pp.84-120.
- 溝口謙三, 1975, 「大学の地域的機能」『山形大学紀要 (教育科学)』第6巻第2号, pp.91-119.
- 武藤孝典・松谷かおる, 1991, 「教職への職業的社会化に関する研究」『信州大学教育学部紀要』第73号, pp.97-116.
- 永井聖二, 1977, 「日本の教員文化」『教育社会学研究』第32集, pp.93-103.
- 中内敏夫, 1969, 「教師と教員と世間師」中内敏夫・川合章編『日本の教師1 小学校教師の歩み』明治図書, pp.32-57.
- 小野浩, 1975, 「教育学部」清水義弘編『地域社会と国立大学』東京大学出版会, pp.291-311.
- 太田拓紀編, 2007, 『新しい青年世代の生活と意識に関する実証的研究』(平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 京都大学大学院教育学研究科「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」研究開発コロキウム 研究成果報告書)。
- 小澤浩明, 1994, 「階級・階層の再生産と教員文化」, 久富善之編著『日本の教員文化』多賀出版, pp.57-77.
- 山崎準二, 2002, 『教師のライフコース研究』創風社。
- 油布佐和子, 1999, 『教師の現在・教職の未来』教育出版。

(日本学術振興会特別研究員 教育社会学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Determinants for Aspiring Teachers: Focusing on Family Background of University Students

OTA Hiroki

This paper examined factors that lead university students to pursue a teaching career by focusing on their family backgrounds. A questionnaire survey was conducted among students in 18 universities to evaluate their father's profession, level of education in family, experience of lesson (e.g. sports, cramming school) in childhood and their outlook of the future. The results show that among the students pursuing teaching, the majority of their fathers are white-collared businessmen, and less blue-collared businessmen and farmers. Further, these students have a stronger cultural and educational experience in their family. In addition, male students tend toward sports, while female students take music lessons in their childhood. On investigating the valuable factor in their future, it is found that students pursuing teaching are less status-oriented and more family-oriented. Finally, the author examined which factors affect the aspiration toward a teaching career from the above mentioned variables. Using multinomial logistic regression, variables such as level of education in the family, experience in sports and music, and family-orientation, raises the possibility of a student aspiring to be a teacher. In addition, it is inferred that family-oriented disposition of would-be teachers is related to "familism", which is regarded as a tradition in teachers' culture.